

2012 年度春季 大阪大学言語社会学会・言語文化学会 合同研究発表会

(大阪大学言語文化学会 第 41 回大会)

発表要旨 (言語文化学会会員分)

第 1 会場 (E 棟 101 教室)

日本語作文授業におけるピア・レスポンス実施に関する教員の意識調査  
—中国の大学でのインタビューから

李 静 (言語文化専攻博士後期課程)

中国の 4 年制大学の日本語作文教育では、日本語の作文授業担当教員が一方的に作文を添削する指導法が一般的に採用されていると指摘されている。中国の教育の現状として大人数クラスが多いため、学習者一人ひとりに適した作文の指導が難しく、学習者の日本語作文能力を向上させることが困難であることと推測される。そのため、教員添削のみの指導による中国の大学の日本語作文教育には限界があると考えられる。

ピア・レスポンスは、学習者の批判的視点の養成や自己推敲能力の向上が期待される活動である。したがって、中国の大学の日本語作文教育の改善のためにピア・レスポンスの導入は大いに意義があると考えられる。本研究では教員のピア・レスポンスへの意識を把握することを通して、中国の大学の日本語作文教育におけるピア・レスポンスの実施に向けた具体的な問題点や将来的な課題を考察する。

中国の 4 大学の日本語学科の作文授業担当教員 4 名 (いずれもピア・レスポンスによる教育は未経験) を対象に、1 名ずつ約 1 時間の半構造化インタビューを行ったところ、ピア・レスポンス活動自体に対して、教員は学習者の作文学習に対する促進効果が期待できると考えていることがわかった。しかし、その一方、大きく分類して以下 4 つの制限および問題点があることも指摘し、それにより実施が困難になっていることを述べた。(1) 学習者間の日本語能力差による問題、(2) 学習者の学習意欲の低下、(3) 日本語能力が低い学習者の参加不適合、(4) 教員のピア・レスポンスについての知識の不足。以上の問題を解決し、ピア・レスポンスを中国の大学の日本語作文教育において実施する方法について、具体的に検討したい。

小学校における JSL 児童生徒に対する日本語教育の一考察  
—ある日本語指導協力者のライフヒストリーからみる

## 潘 寧（言語文化専攻博士前期課程）

近年、親に伴い来日し、公立小中学校に編入学する JSL (Japanese as a second language : 第二言語としての日本語) を学ぶ必要のある児童生徒が増加し、それに伴う教育が課題になっている。(バドラー, 2011) では、日本の学校における JSL 教員研修の整備について、現行している加配システムに相応する専門的教員資格が設けられておらず、また、「日本語教師資格」は教員免許として認められないがゆえに正規の教員として学校で働けないので、加配教員は学校での立場が弱く、経験や知識にも個人差が激しいと指摘している。さらに雇用状態が不安定であることにより、意欲のある人材がこの職に留まりにくいという現状を生み、現場の人手不足の一因になると考えられる。また、雇用の安定化に繋がる現時点の日本語指導者やバイリンガル相談員の生活基盤の把握、および学校と行政の組織の中で行われた実践の内実に関わる質的研究が未だに十分とは言えない。そこで、パイオニアとして JSL 児童の教授法を探求し、教材開発の組織を立ち上げてネットワークを広げ、現在教員研修および地域のボランティア養成にも携わっている日本語指導協力者 A 先生のライフヒストリーに注目したい。Cole & Knowles (2000) は「教えるという行為は教師が人として自分が誰であるのかを表現するものであり、教師がそれまでの人生で身に付けてきた信念、価値観、物の見方、経験が染み込んでいる」と考え、教育実践を内省する reflection と、個人史の文脈の中で教師の私生活と職業的キャリアを関連付け、子供時代を含む個人的な経験が教育実践にどのように影響しているかを理解するための内省を区別した reflexive inquiry を提唱している。本研究は、A 教師のライフヒストリーを構築し、彼女の reflection および reflexive inquiry を語ってもらうことによって、JSL 児童を専門とする教師の実践知、個人的実践知、さらに専門知が伴う風景の構築を試みた。

## 臨界期仮説とモニター・フィードバックの特性との関連について

### 森本 圭子（言語文化専攻博士後期課程）

私は、「言語獲得の過程におけるモニターとフィードバック」(森本：2011) では、自分の事例研究(森本：1989)を基に、被験者が、彼の言語を獲得する過程において、彼自身がすでに獲得した文法規則に基づき常に彼の発話をモニターし、フィードバックしているという事を述べた。

次に、「自然な会話におけるモニターとフィードバック」(森本：2011) では、さらに、すでに自分自身の言語の文法を獲得したと考えられる英語の母国語話者と日本語の母国語話者の自然な会話を分析し、それぞれ英語と日本語では、語順が異なるが(英語の構造は、S(主語)+V(動詞)+O(目的語)で、日本語の構造は、S(主語)+O(目的語)+V(動詞)、モニター・フィードバックが行われる点においては、どちらの母国語話者も、文レベルで行われていると述べた。

ここでは、以上の研究を基に、更に言語能力（Chomsky:1989）の解明の一端として、このモニターとフィードバックが母国語として、又、第二言語としての言語獲得においては、どのような点において、同じで、又、異なるかを臨界期仮説（Lenneberg:1967）との関連において考察する。そして、その為に、初めに、英語の母国語話者の自然な会話を分析したものと、日本語を母国語とする話者が、第二言語として獲得した自然な英語の会話を分析したものを比較する。そして、次に、日本語の母国語話者の自然な会話を分析したものと、英語を母国語とする話者が第二言語として獲得した自然な日本語の会話を分析したものとを比較する。

## 中国人日本語学習者が話す日本語と中国語のイントネーションの対比 —フォーカス別によるピッチ曲線変動からの分析

張 若星（言語文化専攻博士後期課程）

本研究では、まず、中国語母語話者が話す日本語のイントネーションに主眼を置いた。フォーカス発話におけるイントネーションの問題点をピッチ曲線の上下変化から分析した。実験では、フォーカスを担う要素が平板型アクセントの場合と起伏型アクセントの場合に分けて、「田中さんが七日に電車で東京に出かけます。」のように、実験文を日本語母語話者および中国語母語話者に読み上げてもらった。分析にはピッチ曲線を取り出し、曲線の上下変化からそれぞれの発話特徴をまとめた。結論としては、学習者の毎回の発話実態には差異があり、学習者間のばらつきが見られる。話者によっては文の音調が日本語母語話者のように「へ」型にならず、文末にかけて緩やかな上昇を見せる場合もあり、非フォーカス語のピッチがフォーカス語より高くなる場合がある。フォーカス語のアクセントのピッチレンジが狭く、フォーカス語と非フォーカス語の間に、相対的な高低の差が顕著には表れない。

では、中国語母語話者が抱える日本語フォーカス発話のイントネーションの問題点の原因は中国語母語干渉なのか、を中国語フォーカス発話実験により証明した。実験では、日本語例文を中国語に翻訳し、「田中七号坐电车去东京。」のように、被験者に実験文を読み上げてもらった。分析にはピッチ曲線とインテンシティ曲線を取り出し、上下変化から中国語母語話者の発話特徴をまとめた。その結果、フォーカスとインテンシティには、明確な対応関係が見られなかったため、中国語フォーカスはインテンシティにより実現されるとは言えず、ピッチはよりフォーカスと密接に関係しているが、日本語ほど明瞭な関係ではなく、単純にピッチに依拠しているものでもない。

今後、ピッチ曲線のみでなく、インテンシティ、フォルマント、母音、子音の持続時間を計測するなど、多要素を考慮し、日本語と中国語のイントネーションの本質的な特性を客観的に記述したい。

## 第2会場 (E棟102教室)

### 時を表す副詞節の解釈の曖昧性に関する統語的分析

前田 晃寿 (言語文化専攻博士前期課程)

本発表の目的は Miyamoto (2011)の分析の問題点となる言語事実を指摘し、それに対する修正案として Agree に基づいた分析を示すことである。本発表の分析の中心となる例は Munn (1991)によって指摘された例である (Munn 1991 参照)。Munn によって指摘された例では、束縛代名詞と Op2 が低い節内に存在する場合は低い解釈を取ることができるが、そうでない場合は取ることができない。このパラダイムに対して Miyamoto では Takahashi (1997)で提案された素性移動に関する CED と Rizzi (2004)で提案された素性に基づいた最小性という分析が行われている。

しかし Miyamoto の分析では(2)の例の曖昧性を捉えることができない。

(2) Everyone<sub>1</sub> left before John told him<sub>1</sub> that Mary would meet Bill. (ambiguous)

(2)では CED と最小性違反が生じているにも関わらず、低い解釈を取ることができる。

これらの問題点を解決するために本発表では Agree に基づいた分析を行う。この分析に従うと、(1a, b)では先行詞と代名詞が基底生成された段階で Op2 と Agree を適用することができる。それに対して(1c)では先行詞と代名詞が基底生成された段階で Op2 と Agree を適用することができない。なぜなら everyone と Op2 の間に Op1 が存在し、DIC に違反してしまうからである。それに対して(2)では先行詞と代名詞が基底生成された段階で Op2 と Agree を適用することができる。このように束縛代名詞の分配解釈を保証するメカニズムとして Agree に基づく分析を採用することによって、(1c)と(2)のパラダイムを捉えることができるのである。

## 第3会場 (E棟103教室)

### 消えゆく民族意識

#### 一下ラウジッツの事例より

林 美里 (言語文化専攻博士後期課程)

ドイツ東部のブランデンブルク州とザクセン州にはスラヴ系少数民族のソルブ人が住んでいる。現在その人口は約 6 万人で、2 万人がブランデンブルク州の下ラウジッツ、約 4

万人がザクセン州の上ラウジッツに住んでいる。言語文化の発達の中で書き言葉として上下ソルブ語を作り上げ、現在では異なる標準語を持つに至っているが、上下ラウジッツの状況はかなり異なる。話者数からも面積からも下ラウジッツのほうが言語や文化の存続においてかなり危機的な状況にある。事実、ドイツ語とソルブ語のバイリンガル教育「ヴィタイ Witaj」を推進するソルブ学校協会の調査では上ラウジッツではソルブ語の継承が行われているのに対し、下ラウジッツではソルブ語が家庭言語として継承されていないことが報告されている。もとより、「言語は集団のアイデンティティを形成する役割を果たす」ものであり、「言語が消滅すれば、伝統的な文化とアイデンティティの重要な一部も失われる」（ネトル 2001）といわれる。さらには言語の消滅が人類全体と関わりのある問題として捉えられ、下ソルブ語が話されなくなることは下ソルブ語や下ソルブの文化の喪失だけでなく、人類にとっての価値あるものの喪失を意味すると考えられている。そこで本発表ではこれまであまり注目されてこなかった上ソルブ人の Sorbe 概念とは異なる下ソルブ人の Wende 概念を中心に、民族意識が衰退する歴史的背景について考察する。そのため、まず第一に主にソルブ史に関する文献調査から Wende 概念の起源や特徴を明らかにし、Wende 概念が下ソルブ人の形成にどのように影響してきたのかを検討する。第二にこの概念が両ラウジッツの現状にどのように影響しているのかを明らかにする。第三に近年下ラウジッツを中心に進められている「ヴィタイ Witaj」におけるソルブ学校協会の調査結果を基にソルブ語使用の推移から下ソルブ人の民族意識がどのように変化しているのかについても考察し、解明する。

## 職人マンガの歴史的展開と特徴

林 蔚榕（言語文化専攻博士後期課程）

戦後、急速な発展を遂げた日本マンガは、表現形態はもちろん、読者層の広がりとともに、そのジャンルや物語内容も多種多様になりつつある。この「多様性」が日本マンガの主な特徴とも言えよう。そこで、戦後の職人を題材にしたマンガ作品とえば、まず 1960 年代の楠勝平による短編もの『名刀』（『ガロ』1966 年 10 月号）に遡ることができる。そして、1970 年代に入ると、職人マンガのはしりである長編もの『釘師サブやん』（1971 年 牛次郎、ビッグ錠）と『包丁人味平』（1973 年 牛次郎、ビッグ錠）が登場する。その後も、職人マンガは描き続けられ、現在でも数多くの作品がマンガ雑誌で連載されている。

このように、様々な種類のマンガが競い合う中で、職人マンガは 1960 年代から一つの題材として描かれ続けてきたが、それに焦点を当てた研究は、筆者が調査したかぎりではまだ報告されていない。また、「職人マンガ」というジャンルの概念も定着しておらず、そのほとんどが料理マンガもしくは職業マンガに分類される傾向にある。ここでは、一つの基礎研究として、職人マンガとはどのような作品を指すのかという素朴な疑問を元に、その

概念を構築したい。

本発表では、まず職人マンガの成立およびそれが展開していく過程を検討し、その類型と傾向を提示する。次いで、作品を取り上げながら、マンガというメディアを通して表現される職人ストーリーにはどのような特徴が見られるかを考察する。今まで目が向けられなかった職人マンガを通史的に概観し、扱われている主題と多岐に広がるサブジャンルを整理する点に本発表の意義があると考えられる。

## 日系アメリカ人 4 世に関する研究

### —E.I.Q.調査を用いて

中橋 真穂（言語文化専攻博士後期課程）

日本人がアメリカ合衆国へ渡ってから 100 年以上経った現在、日系アメリカ人は、世代交代を経て次第に日本との繋がりが薄れ、アジア系アメリカ人化しているといわれている（ルークス 2004）。そういった中、「自分のルーツ探し」として大学などで日本語を学習するなど、日本との繋がりを求める若い世代の日系アメリカ人も少なくない。日系アメリカ人は世代により特徴が大きく異なる（竹沢 1994）ため、1880 年頃アメリカへ渡った 1 世と現在 20 歳前後である 4 世では、エスニック・アイデンティティ、使用言語、文化など様々な点で異なる。また、外婚が進み、各文化集団の持つ伝統的な文化が必ずしも次世代に受け継がれなくなっている現状を考えると、各集団の価値観や行動特性を学ぶ意義は大きい（森茂 1999）。

そこで、カリフォルニア州の S 大学に通う日系アメリカ人 4 世に対して **Ethnic Identity Questionnaire** 調査を実施し、世代間のエスニック・アイデンティティの変容や行動様式の変化について考察した。**E.I.Q.** は、日系アメリカ人のアメリカ人化を把握するために Masuda(1970)によって開発された。Masuda(1970)、Connor(1977)は 1～3 世に対して、江淵 (2002) は 2、3 世に対してこの調査を実施し、世代を追うごとに行動様式や意識にアメリカ化が見られることを明らかにした。

これらのデータと、本調査で得られた 4 世のデータを比較すると、4 世は 2、3 世に比べ、例えば「白人からの差別意識の希薄化」「日系コミュニティ以外の人間関係を重視」「より個人主義的」といった傾向があり、「行動様式はアメリカ化」しているといえる。一方、「日本料理が好き」「日本文化を継承すべき」といった「食習慣や言語、文化に関して日本人的な要素」を持ち合わせていることが明らかになった。このように各世代の相違点や特徴を詳しく分析することで、アメリカ化した部分や、その内容を客観的に把握する。そして、まだ比較的研究や報告の少ない若い世代である 4 世の実態を明らかにし、理解を深める。

## 安懐南の前期身辺小説における知識人男性主人公の性格について —調和型の七作品を中心に

伊藤 啓（言語文化専攻博士後期課程）

安懐南は植民地期から第二次世界大戦後の朝鮮において活躍した小説家・評論家である。本発表は彼が1930年代を中心に発表した、日本の私小説にほぼ該当する身辺小説と呼ばれる小説について、作品内に登場する知識人男性主人公がどのような性格の人物として描かれているのかを分析・考察したものである。

安懐南の身辺小説は1933年半ばから1937年初頭までの前期身辺小説と、それ以降の後期身辺小説とに大きく区分できると言える。また日本の近現代文学研究においては、私小説を調和型私小説と破滅型私小説とに二分する分類が定着している。本発表ではこの二つの分類を適用し、安懐南の前期身辺小説の中でも特に調和型と判断される七作品を取り上げることにした。

発表ではまず関連する安懐南文学の先行研究と、植民地期朝鮮文学における知識人男性について分析した先行研究について概観する。次に上の作品内に見られる主人公の描写部分を一つ一つ取り上げながら、彼らに共通して見られる性格の特徴について考えた。

彼らはその多くが感傷的で心配性な性格の人物として描かれていると言える。しかしその反面、恋人や妻に対してはその恋愛感情から、強い意志を持ち大胆な言動を見せる積極的な性格の持ち主としても登場しており、その頑固さ故に言動に論理的な矛盾が生じている場面もある。またその他の登場人物に対しては怖気づいたり反論を言えなかったりする消極的な性格の一面も見せており、また息子や父などに対する家族愛の強い人物として描かれている場面も幾つか見られた。

日本の私小説と同様に作品の主人公らは全て作者自身をモデルとしているが、その性格も安懐南自身の性格がよく反映されていると見られる。またこのような知識人男性主人公の性格は、植民地期朝鮮文学における知識人男性の描かれ方の中でも特徴的なものとして、その文学史上に位置づけることが可能ではないかと思われる。

## 神の性別表現

### —『古事記』上巻を中心として

シピトゥーニナ・マリーナ（大阪大学非常勤講師）

現代テキスト分析の方法として用いられるジェンダー論は文学研究では様々な成果を成し遂げて、古代テキストにも用いるようになってきている。本発表では日本神話編集である『古

事記』上巻に中心を絞って、神の性別表現を考察する。

記紀に登場する主役の神は性別が明白に表現されており、その表現方法は以下の四つである。

- ① 神の名前に性別を表す語彙
- ② 呼び名
- ③ 体の描写
- ④ 神の行動（性別の表記が名前にある女神と結婚することなど）

記紀神話の主役の神における性別の表現について検討した結果、活躍する神々の性別は神の名前や呼称と神の行動で表現され、更に性別を特定できる身体の記述もあると分かった。すなわち、語彙レベルでは性別が神名に入る「キーミ」、「コーメ」と「ヲーメ」のように対義的に用いられる男女それぞれを表す語彙と「女」の意を表す「イモ」「ミオヤ」、「男」を表す「ワケ」といった非対義的な言葉で表現されている。さらに、神は言及される時、第二人称の「ナニモ」（女）と「ナセ」（男）、および代理語として「父」「母」「姉」「妹」「兄」「弟」という単語が用いられる場合がある。

非対義的語彙として用いられている女神の神名の前にでる「イモ」、および女神の神名の後にでるか単独で使われる「ミオヤ」という語彙が観察できた。それに対し男神の神名に「ワケ」という語彙が用いられている。

叙述レベルでは、性別が体の描写、あるいは神が比賣と結婚することによって表現されている。イザナキノ命を除けば、体の描写によっては女性の性が表現されている。それに対して、男神の性別が分かる手掛かりになるのは結婚の記述である。

本発表ではジェンダー的な観点でそれらの性別表現の使用方法および特徴について論じたいと考える。